

源氏物語

初音

紫式部

青空文庫

若やかにうぐひすぞ啼く初春の衣くば
 られし一人のやうに
 (晶子)

新春第一日の空の完全にうらかな光のもとには、どんな家の庭にも雪間の草が緑のけはいを示すし、春らしい霞かすみの中では、芽を含んだ木の枝が生気を見せて煙っているし、それに引かれて人の心ものびやかになっていく。まして玉を敷いたと言ってよい六条院の庭の初春のながめには格別なおもしろさがあつた。常に増してみがき渡された各夫人たちの住居すまいを写すことに筆者は言葉の乏しさを感じる。春の女王にょおうの住居はとりわけすぐれていた。梅花かおりの香も御簾みすの中の薰物たきものの香と紛らわしく漂たつていて、現世の極楽がここであるような気がした。さすがにゆつたりと住みなしているのであつた。女房たちも若いきれいな人たちは姫君付きに分けられて、少しそれより年の多い者ばかりが紫にょおうの女王のそばにいた。上品な重味のあるふうをして、あちらこちらに一団を作っているこうした女房らは齒固はがための祝儀などを仲間どうしでしていた。鏡餅かがみもちなども取り寄せて、今年じゅうの幸福を祈るのに興あじ合っている所へ主人あるじの源氏がちよつと顔を見せた。懐中手ふところでをしていた

者が急に居ずまいを直したりしてきまりを悪がった。

「たいへんな御祝儀なのだね、皆それぞれ違ったことの上に祝福あれと祈っているのだろうね。少し私に内容を洩もらしてくれないか、私も祝詞を述べるよ」

と微笑ほほえんで言う源氏の美しい顔を見ることが今年ことしの春の最初の幸福であると人々は思っている。

中将の君が言う。

「御主人様がたを鏡のお餅にも祝っております。自身たちについての祈りなどをいたすものでございません」

朝の間は参賀の人が多くて騒がしく時がたったが、夕方前になって、源氏が他の夫人たちへ年始の挨拶あいさつを言いに出かけようとして、念入りに身なりを整え化粧をしたのを見ることは実際これが幸福でなくて何であろうと思われた。

「今朝けさ皆が鏡餅の祝詞を言い合っているのを見てうらやましかった。奥さんには私が祝いを言つてあげよう」

少し戯れも混ぜて源氏は夫人の幸福を祝った。

うす氷解けぬる池の鏡には世にたくひなき影ぞ並べる

これほど真実なことはない。二人は世に珍しい麗質の夫婦である。

曇りなき池の鏡によろづ代をすむべき影ぞしるく見えける

と夫人は言った。どの場合、何の言葉にもこの二人は長く変わらぬ愛を誓い合うのであった。

ちようど元日が子の日ねにあたっていたのである。千年の春を祝うのにふさわしい日である。姫君のいる座敷のほうへ行ってみると、童女や下仕えの女が前の山の小松を抜いて遊んでいた。そうした若い女たちは新春の喜びに満ち足らったふうであった。北の御殿からいろいろときれいな体裁に作られた菓子ひげかごの髭籠と、料理の破子わりご詰めなどがここへ贈られて来た。よい形をした五葉の枝に作り物の鶯うぐいすが止まらせてあって、それに手紙が付けられてある。

年月をまつに引かれて経る人に今日鶯の初音聞かせよ

「音せぬ里の」（今日だにも初音聞かせよ鶯の音せぬ里は住むかひもなし）と書かれてあるのを読んで、源氏は身にしむように思った。正月ながらもこぼれてくる涙をどうしようもないふうであった。

「この返事は自分でなさい。きまりが悪いなどと氣どつていてよい相手でない」

源氏はこう言いながら、硯の世話などをやきながら姫君に書かせていた。かわいい姿で、毎日見ている人さえだれも見飽かぬ氣のするこの人を、別れた日から今日まで見せてやっていないことは、真実の母親に罪作りなことであると源氏は心苦しく思った。

引き分かれ年は経れども鶯の巢立ちし松の根を忘れめや

少女の作でありのままに過ぎた歌である。

夏の夫人の住居は時候違いのせいかな非常に静かであった。わぎと風流がった所もなく、品よく、貴女の家らしく住んでいた。源氏と夫人の二人の仲にはもう少しの隔てというも

のもなくなつて、徹底した友情というものを持ち合つていた。現在では肉体の愛を超越した夫婦であつた。しかも精神的には永久に離れまいと誓い合う愛人どうしである。几帳きちようを隔はなてて花散里はなちるさとはすわつていたが、源氏がそれを手で押しやると、また花散里はそうするまゝになつていた。お納戸色という物は人をはなやかに見せないものであるが、その上この人は髪のごあいなどももう盛りを通り過ぎた人になつていた。優美な物ではないが添え毛でもすればよいかもしれぬ。

「私のような男でなかつたら愛をさましてしまふかもしれない衰退期の顔を、化粧でどうしようとしてもしないほど私の心が信じられているのがうれしい。あなたが軽率な女で、ひがみを起おこして別れて行つていたりしては、私にこの満足は与えてもらえなかつたでしょう」源氏は花散里に逢あうごとによくこんなことを言つた。永久に変わつていかない自身の愛と、この女の持つ信頼は理想的なものであるとさえ源氏は思つていた。親しい調子でしばらく話していたあとで、西の対のほうへ源氏は行つた。

玉たま鬢かすらがここへ住んでまだ日の浅いにもかかわらず西の対の空気はしっくりと落ち着いたものになつていた。美しい童女によい好みの服装をさせたのや、若い女房などがおおぜいいて、室内の設備などはかなり行き届いてできてはいるが、まだ十分にあるべき調度

が調っているのではなくてもとにかく感じよく取りなされてあつた。玉鬘自身もはなやかな麗人であると、見た目はすぐに感じるような、あのきわだった山吹の色の細長が似合う顔と源氏の見立てたとおりの派手はでな美人は、暗い陰影というものは、どこからも見いだせない輝かしい容姿を持っていた。苦勞をしてきた間に少し少なくなった髪が、肩の下のほうでやや細くなりさらさらと分かれて着物の上にかかっているのも、かえってあざやかな清さの感ぜられることであつた。今はこうして自分の庇護のもとに置くがあぶないことであつたと以前のことを深く思う源氏は、この人を情人にまでせずにはおかれないのでなからうか。肉親のようにまでなつて暮らしていながらもまだ源氏は物足りない氣のすることを、自身ながらも奇怪に思われて、表面にこの感情を現わすまいと抑制していた。

「私はもうずっと前からあなたがこの家の人であつたような氣がして満足してはいますが、あなたも遠慮などはしないで、私のいるほうなどにも出ていらつしやい。琴を習い始めた女の子などもいますから、その稽古けいこを見ておやりなさい。氣を置かねばならぬような曲がつた性格の人などはあちらにいませんよ。私の妻などがそうですよ」

と源氏が言うと、

「仰せどおりにいたします」

と玉鬘たまかすらは言っていた。もつともなことである。

日の暮れ方に源氏は明石あかしの住居すまいへ行つた。居間に近い渡殿わたどのの戸をあけた時から、もう御簾みすの中の薫香たきもののおいが立ち迷つていて、気高い艶えんな世界へ踏み入る気がした。居間に明石の姿は見えなかつた。どこへ行つたのかと源氏は見まわしているうちに硯すずりのあたりにいろいろな本などが出ているのに目がついた。支那しなの東京錦とうきんにしきの重々しい縁ふちを取つた褥ししねの上には、よい琴が出ていて、雅味のある火鉢ひばちに侍従香しやくじゆうかうがくゆらしてある。その香の高低たかひ中へ、衣服にたきしめる衣被香えびかうも混じつて薫くゆるのが感じよく思われた。そのあたりへ散つた紙に手習い風の無駄むだ書きのしてある字も特色のある上手じょうずな字である。くずした漢字をたくさんには混ぜずに感じよく書かれてあるのであつた。姫君から来た鶯うぐいすの歌の返事に興奮して、身にしむ古歌などが幾つも書かれてある中に、自作もあつた。

珍しや花のねぐらに木づたひて谷の古巢をとへる鶯

やつと聞き得た鶯の声というように悲しんで書いた横にはまた「梅の花咲ける岡辺をかべに家しあれば乏しくもあらず鶯の声」と書いて、みずから慰めても書かれてある。源氏はこの

手習い紙をながめながら微笑ほほえんでいた。書いた人はきまりの悪い話である。筆に墨をつけて、源氏もその横へ何かを書きすさんでいる時に明石は膝いざ行り出た。思ひ上がった女性ではあるが、さすがに源氏に主君としての礼を取る態度が謙遜けんそんであった。この聡明そうめいさは明石の魅力でもあった。白い服へ鮮明に掛かった黒髪くろかみの裾すそが少し薄くなつて、きれいに分かれた筋を作っているのもかえつてなまめかしい。源氏は心が惹ひかれて、新春の第一夜をここに泊まることは紫夫人を腹立たせることになるかもしれぬと思ひながら、そのまま寝てしまった。六条院の他の夫人の所ではこの現象は明石夫人がいかに深く愛されているかを思わせるものであると言っていた。まして南の御殿の人々はくやしがつた。

源氏はまだようやく曙あけぼのぐらいの時刻に南御殿へ帰つた。こんなに早く出て行かないでもいいはずであるのにと、明石はそのあとでやはり物思わしい気がした。紫の女王はまして、失敬なことであると、不快に思っているはずの心からを察して、

「ちよつとうたた寝をして、若い者のようによく寝入ってしまった私を、迎えにもよこしてくれませんでしたね」

こんなふうにも言つて機嫌きげんを取っているのもおもしろく思われた。打ち解けた返辞お返しのしてもらえない源氏は困つたまま、そのまま寝入つたふうを作つたが、朝はずつと遅おそくな

つて起きた。正月の二日は臨時の饗宴きょうえんを催すことになつていたために、忙しいふうをして源氏はきまり悪さを紛らせていた。親王がたも高官たちもほとんど皆六条院の新年宴会に出席した。音楽の遊びがあつて贈り物に纏頭てんとうに六条院にのみよくする華奢かしやが見えた。多数の縉紳しんしんは皆きらびやかに風采ふうさいを作っているが、源氏に準じて見えるほどの人もないのであつた。個別的に見ればりっぱな人の多い時ではあるが、源氏の前では光彩を失つてしまうのが気の毒である。つまりぬ下僕しもべなども主人に従つて六条院へ来る時には、服装も身の取りなしをも晴れがましく思うのであつたから、まして年若な高官たちは妙齡の姫君が新たに加わつた六条院の参座には夢中になるほど容姿を気にして来て、平年と違つた光景が現出された新春であつた。春の花を誘う夕風がのどかに吹いていた。前の庭の梅が少し咲きそめたこの黄昏たそがれ時に、楽音がおもしろく起こつて来た。「この殿」が最初に歌われて、はなやかな気分がまず作られたのである。源氏も時々声を添えた。福草さきくさの三つ葉四つ葉にというあたりがことにおもしろく聞かれた。どんなことにも源氏の片影が加わればそのものが光づけられるのである。こうしたはなやかな遊びも派手はでな人出入りの物音も遠く離れた所で聞いている紫の女王にょおう以外の夫人たちは、極楽世界に生まれても下品げほんげ下生しやうの仏で、まだ開かない蓮はすの蕾つぼみの中にこもっている気がされた。まして離れた東の院

にいる人たちは、年月に添えて退屈さと寂しさが加わるのであるが、うるさい世の中と隔離した山里に住んでいる気になっていて、源氏の冷淡さをとがめたり恨んだりする気にもなれなかつた。物質的の心配はいつさいなかつたから、仏勤めをする人は専念に信仰の道に進めるし、文学好きな人はまたその勉強がよくできた。住居すまいなども個人個人の趣味と生活になつた様式に作られてあつた。

新年騒ぎの少し静まつたころになつて源氏は東の院へ来た。末摘花すえつむはなの女王にょおうは無視しがたい身分を思つて、形式的には非常に尊貴な夫人としてよく取り扱つていたのである。昔たくさんあつた髪も、年々に少なくなつて、しかも今は白い筋の多く混じつたこの人を、面と向かつて見ることが堪えられず気の毒で、源氏はそれをしなかつた。柳の色は女が着て感じのよいものでないと思われたが、それはここだけのことで、着手が悪いからである。陰気な黒ずんだ赤の搔練かいねりの糊氣のりけの強い一かさねの上に、贈られた柳の織物の小桂こうちぎを着ているのが寒そうで気の毒であつた。重ねに仕立てさせる服地も贈られたのであるがどうしたのであろう。鼻の色だけは春の霞かすみにもこれは紛れてしまわないだろうと思われるほどの赤いを見て、源氏は思わず歎息たんそくをした。手はわざわざ几帳きちようの切れを丁寧に重ね直した。かえつて末摘花は恥ずかしがっていないのである。こうして変わらぬ愛をかける源

氏に真心から信頼している様子に同情がされた。こんなことにも常識の不足した点のあるのを、哀れな人であると源氏は思つて、自分だけでもこの人を愛してやらねばというふう
に考へるところに源氏の善良さがうかがえるのである。話す声なども寒そうに慄ふるえていた。
源氏は見かねて言つた。

「あなたの着物のことなどをお世話する者がありますか。こんなふう^にに氣樂に暮らして
てよい人というものは、外見はどうでも、何枚でも着物を着重ねているのがいいのですよ。
表面だけの体裁よさを作つているのはつまりませんよ」

女王はさすがにおかしそうに笑つた。

「醍醐だいていの阿闍梨あじやりさんの世話に手がかかりましてね、仕立て物が間に合いませんでした上に、
毛皮なども借りられてしまひまして寒いのですよ」

と説明する阿闍梨というのは鼻の非常に赤い兄の僧のことである。あまりに見榮を知ら
ない女であると思ひながらも、ここではまじめな一面だけを見せている源氏はなおも注意
をする。

「毛皮はお坊様にあげたほうが適當でいいのですよ、そんな物より、白い着物という物は
何枚でも重ねて着ていいのですからね。なぜあなたはそうしないのですか。入り用な物も

送つてよこすのを私が忘れていれば、遠慮なく言つてよこしてください。もとからぼんやりとした私はまた怠なまけ者でもあるし、ほかの方たちのこととこんがらがってしまふこともあつて、濟まない結果にもなるのですよ」

と言つて源氏は、隣の二条院のほうの蔵くらをあけさせ、絹あやや綾あやを多く紅くれないの女王に贈つた。荒れた所もないが、男主人の平生住んでいない家は、どことなく寂しい空気のたまつてゐる気がした。前の庭の木立ちだけは春らしく見えて、咲いた紅梅なども賞しょう翫がんする人のないのをながめて、

ふるさとの春の木末にたづねきて世の常ならぬ花を見るかな

と源氏は独ひとりごと言ことしたが、鼻の赤い夫人は何のこととも気づかなかつたであろう。

空蟬うつせみの尼君の住んでゐる所へ源氏は来た。その主人あるじらしくここは住まずに、目だたぬ一室すまいにいて、住居すまいの大部分を仏間に取つた空蟬が仏勤めに傾倒して暮らす様子も哀れに見えた。経巻の作りよう、仏像の飾り、ちよつとした闕伽あかの器具などにも空蟬のよい趣味が見えてなつかしかつた。青鈍あおにび色の几帳きちようの感じのよい蔭かげにすわっている尼君の袖口そでぐち

の色だけにはほかの淡い色彩も混じっていた。源氏は涙ぐんでいた。

「松が浦島うらしま（松が浦島今日けふぞ見るうべ心あるあまも住みけり）だと思つて神聖視するのにとどめておかねばならないあなたなのです。昔から何という悲しい二人でしょう。しかしこうして逢つてお話しするくらいのは永久にできるだけの因縁があるのですね」
などと言つた。空蟬の尼君も物哀れな様子で、

「ただ今こんなふうには御信頼して暮らさせていただきますことで、私は前生に御縁の深かつたことを思つております」

と言ふ。

「あなたを虐げた過去の追憶に苦しんで、おりおり今でも仏にお詫びを言わねばならないのが私です。しかしおわかりになりましたか、ほかの男は私のように純なものではないということ、あなたはそれからの経験でお知りになつただらうと思う」

継息子ままむすこのよこしまな恋に苦しめられたことを、源氏は聞いていたのであろうと女は恥ずかしく思つた。

「こんなにもじめになりました晩年をお見せしておりますことでだれの過去の罪も清算されるはずでございます。これ以上の報いがどこにございましょう」

と言つて、空蟬うつせみは泣いてしまつた。昔よりも深味のできた品のよい所が見え、過去の恋人で現在の尼君として別世界のものに扱うだけでは満足のできかねる気も源氏はしたが、恋の戯れを言いかける相手ではなかつた。いろいろな話をしながらも、せめてこれだけの頭によさがあの人になればよいのと末摘花の住居すまいのほうがながめられた。こんなふうで源氏の保護を受けている女は多かつた。だれの所も洩もらさず訪問して、

「長く来られない時もあります、心のうちでは忘れていのではないのです。ただ生死の別れだけが私たちを引き離すものだと思いますが、その命というものを考えると、実に心細くなりますよ」

などとなつかしい調子で恋人たちを慰めていた。皆ほどほどに源氏は愛していた。女に對して驕きょうまん慢まんな心にもついなりそうな境遇にいる源氏ではあるが、末々の恋人にまで誠意を忘れず持つてくれることに、それらの人々は慰められて年月を送つていた。

今年ことしの正月には男踏歌おとことづかがあつた。御所からすぐに朱雀院すざくへ行つてその次に六条院へ舞い手はまわつて来た。道のりが遠くてそれは夜の明け方になつた。月が明るくさして薄雪の積んだ六条院の美しい庭で行なわれる踏歌がおもしろかつた。舞や音楽しやうぞうの上じやうぞう手てな若い役人の多いところで、笛なども巧みに吹かれた。ことにここのできばえを皆晴れがましく

思っているのである。他の二夫人らにも来て見物することを源氏が勧めてあったので、南の御殿の左右の対や渡殿わたどのを席に借りて皆来ていた。東の住居すまいの西の対の玉鬘たまかざらの姫君は南の寝殿に来て、こちらの姫君に面会した。紫夫人も同じ所において几帳きちょうだけを隔てて玉鬘と話した。踏歌の組は朱雀院すしよくで皇太后の宮のほうへ行っても一回舞って来たのであったから、時間がおそくなり、夜も明けてゆくので、饗きょう応おうなどは簡単に済みますのでないかと思っていたが、普通以上の歓待を六条院では受けることになった。光の強い一月の暁の月夜に雪は次第に降り積んでいった。松風が高い所から吹きおろしてきてすさまじい感じにももう一歩でなりそうな庭にもう折り目もなくなった青色の上着しろがさねに白襲しろがさねを下にしただけの服装に、見ばえのない綿を頭にかぶっている舞い手が出ているだけのこと、所がらかおもしろくて、命も延びるほどに観衆は思った。源氏の子息の中將と内大臣の公子たちが舞い手の中ではことにはなやかに見えた。ほのぼのと東の空が白んでゆく光に、やや大降りに降る雪の影が見えて寒い中で、「竹川」を歌って、右に寄り、左に集まって行く舞い手の姿、若々しいその歌声などは、絵にかいて残すことのできないのが遺憾である。各夫人の見物席には、いずれ劣らぬ美しい色を重ねた女房の袖口そでぐちが出ていて、曙あけぼのの空に春の花の錦にしきを霞すみが長く一段だけ見せているようで、これがまた見ものであった。舞い人は、

「高巾子」という脱俗的な曲を演じたり、自由な寿詞に滑稽味を取り混ぜたりもして、音楽、舞曲としてはたいして価値のないことで役を済ませて、慣例の纏頭である綿を一袋ずつ頭にいただいて帰った。夜がすっかり明けたので、二夫人らは南御殿を去った。源氏はそれからしばらく寝て八時ごろに起きた。

「中将の声は弁の少将の美音にもあまり劣らなかつたようだ、今は不思議に優秀な若者の多い時代なのです。昔は学問その他の堅実な方面にすぐれた人が多かつたろうが、芸術的のことでは近代の人の敵ではないらしく思われる。私は中将などをまじめな役人に仕上げようとする教育方針を取っていて、私自身のまじめでありえなかつた名誉を回復させたか思っていたが、やはりそれだけでは完全な人間に成りえないのだから、芸術的な所をなぐさせぬようにしなければならぬのだと知った。どんな欲望も抑制したまじめ顔がその人の全部であつてはいやなものですよ」

などと源氏は夫人に言つて、息子をかわいく思うふうが見えた。万春樂を口ずさみにしていた源氏は、

「奥さんがたがはじめてこちらへ来た記念に、もう一度集まってもらつて、音楽の合奏をして遊びたい気がする。私の家だけの後宴があるべきだ」

と言つて、秘蔵の樂器をそれぞれ袋から出して塵ちりを払わせたり、ゆるんだ絃げんを締めさせたりなどしていた。夫人たちはそのことをどんなに晴れがましく思ったことであろう。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年5月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

初音

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>